

## Th.リップス感情移入美学の現象学的再考

峯尾幸之介

---

本発表は、19世紀末に活躍した心理学者リップス（Theodor Lipps, 1851-1914）の感情移入美学を、現象学の立場から再度検討することを目的としている。19世紀における実証的経験科学の台頭によって、自然科学のみならず、人文科学にも経験的方法が適用されるようになり、リップスも経験的心理学の方法を論理学、倫理学、そして美学に転用した。このいわゆる「心理学主義」に対抗して登場したのが、フッサールの現象学であることは周知の事実である。この心理学と現象学との対立は、美学においてもまったく同様の対立を生み出していた。ミュンヘン・ゲッティンゲン初期現象学派に所属した美学者 M. ガイガーは、彼自身、リップスの弟子ではあったが、フッサールの「本質観取」という方法を手がかりにして、リップス美学の主観主義的性格を批判している。他方で、現象学を創始したフッサール自身は、『イデー1』（1913）以降、初期現象学派の客観主義的立場から距離をとり、超越論的現象学という一種の独我論的主観主義の立場へと移行する。そこでは、むしろ、間主観性の問題において「感情移入」（Einfühlung）という用語を採用しているように、リップスの心理学的立場に接近していると言えるだろう。本来、現象学と対立していたはずの心理学的美学を現象学的に再検証することには、次のような正当な理由がある。つまり、リップスを批判していた当のミュンヘン・ゲッティンゲンの現象学的美学は、客観主義の立場を徹底するあまり、美的価値の形而上学的な実在論に陥ってしまった、というのがそれである。たしかにリップスは心理学に依拠する以上、独我論・主観主義であるものの、意識体験に肉薄しようとするフッサール現象学との親和性を持ち、この点は評価されるべきである。さらに、いくつかの問題点があるとはいえ、リップスの美的感情移入論には、美的体験のダイナミズムに対する鋭い洞察が含まれているのである。

本発表では、以下の二点を課題として設定する。

1. リップスの「美的感情移入」の原理を概略的に確認し、現象学的美学者ガイガーによる美的感情移入論批判を参照することで、両者の対立点とその美学的意味を解明する。そのさい、とくに美的価値の客観性（ないし主観性）という認識論的問題を軸として比較し、これにもとづいて、リップスが「心理学主義」とされる立場をとることになった所以をあきらかにする。
2. リップスの「連合」理論に注目する。彼はこの経験論的概念を駆使することで、美的体験が、経験の蓄積をつうじて、より豊かで厚みあるものに発展していく過程を、具体的な事例をまじえて説明している。これを現象学的に純化させる可能性を探究する。そのさい、リップスとフッサール（およびガイガー）による二つの感情移入論の相違点に注意する。